ジャパノイド宣言

A Manifesto for Japanoids

現代日本SFを読むために

巽 孝之
Takayuki Tatsumi

早川書房

ジャパノイド宣言

巽 孝之
Takayuki Tatsumi

A Manifesto for Japanoids

現代日本SFを読むために

早川書房

巽　孝之
1955年東京生まれ。上智大学文学部英文科卒。コーネル大学大学院英文科博士課程修了（Ph. D. 1987）。現在、慶応義塾大学文学部英文科助教授。アメリカ文学専攻。日本ＳＦ作家クラブ会員。
主著作：『サイバーパンク・アメリカ』（勁草書房）『現代ＳＦのレトリック』（岩波書店）など。
編訳書：『サイボーグ・フェミニズム』（トレヴィル）など。

〈検印廃止〉

ジャパノイド宣言

一九九三年十一月二十日　印刷
一九九三年十一月三十日　発行

著者　巽（たつみ）　孝之（ゆき）
発行者　早川　浩
発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二―二
電話　東京　三三五二―三二一一（大代表）
振替　東京・六―四七七九九

印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります
Printed and bound in Japan

ISBN4-15-207822-7 C0095

ジャパノイド宣言

――現代日本ＳＦを読むために――

A MANIFESTO FOR JAPANOIDS

by Takayuki Tatsumi

Copyright ©1993
by Takayuki Tatsumi

First published 1993 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
Tokyo, Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Capital might thus be said to offer up a precursor to Donna Haraway's image of the cyborg, her figure for the deconstruction of the boundaries between technology and nature, persons and machines, and minds and bodies. Just as Haraway glimpses socialist-feminist possibilities in the development of cyborg technology, so too does Marx at moments suggest the utopian potential of industrialization, which both enslaves and frees the body.

Ann Cvetkovich, *Mixed Feelings: Feminism, Mass Culture, and Victorian Sensationalism* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1992), 221 n13.

ジャパノイド宣言——現代日本SFを読むために

一九六〇年代、日本SF第一世代として星新一、小松左京、筒井康隆、眉村卓、光瀬龍、平井和正、豊田有恒、石原藤夫、広瀬正、山野浩一、石川英輔、久野四郎、野田昌宏、半村良、荒巻義雄らがデビューする。彼らにとっては「SFを書く」のが急務だった。地球外に厳然と横たわる「外宇宙」を描くため、アシモフ、クラーク、ハインラインなどが教科書となった。

一九七〇年代、日本SF第二世代として堀晃、梶尾真治、川又千秋、横田順彌、鏡明、田中光二、山田正紀、かんべむさし、山尾悠子、夢枕獏、森下一仁、鈴木いづみ、亀和田武、高千穂遙、栗本薫らがデビューする。彼らにとっては「SFで書く」のが当然だった。第一世代のハードコアSF指向も継承されたが、折しも六〇年代末以降、英国ニューウェーヴSF運動が「外宇宙」ではなく「内宇宙」への道を模索しはじめており、バラード、ディック、レムなどがアイドルになった。

そして一九七〇年代末から八〇年代初頭にかけて、第三世代作家として新井素子、野阿梓、神林長平、大原まり子、岬兄悟、火浦功、水見稜、谷甲州、中原涼、菅浩江、難波弘之らがデビューする。彼らにとって、SFは改めて意識すべき対象ではなくなった。「SFする」ことはすでに八〇年代の日常的様式であり、その内部で敢えてSF作家たらんとするのは「SFについてのSFを書く」こと

に等しい。その結果、大原まり子などは、アメリカSFの成果をごく自然に呼吸しながら、期せずしてギブスンらのサイバーパンク作品とシンクロするような作風を磨きあげていく。

一九八〇年代後半には、第四世代として中井紀夫や大場惑、柾悟郎や松尾由美、東野司、草上仁、狩野あざみらが登場。彼らにとっては、英米SF以前に、高度資本主義下で「日本を書く」ことそのものがSFとなった。かつてアメリカがSF的未来だった時代は終わり、今日ではギブスンのように「日本」という記号内部にこそSF的現在を幻視する方向が典型的である。仮想国家・日本の形成。じじつ草上仁のビジネスマンSFや柾悟郎のサイバーパンク風ジャパネスク小説、中井紀夫の都市伝説風短篇群などが表現するのは、二〇世紀末パックス・ジャポニカの現実そのものだ。折しもサイバーパンクスのひとりルイス・シャイナーは荒巻義雄の初期短篇翻案をつぎつぎと発表しはじめた。

そのうえ、中井紀夫らの短篇群がいわゆる奇妙な味のSFを思わせながら、同時に小林恭二や清水義範などSF風味の純文学作家や中間小説作家の作品群と近接するようになったのも、時代的要請だろう。文学的SFとSF的文学の交錯は、英米では六〇年代ニューウェーヴに始まり八〇年代には常識化したが、日本でもそれら境界作品のジャンルとマーケットが模索されつつある。脱文学と脱SF双方のベクトルが交差しあうその交点に、仮想日本の仮想文学が形成される。

さて仮想国家の仮想文学には、いったいどのような仮想の人間像が表現されてきたのだろうか。それは日本的主体そのものがサイボーグ的に形成されてきたかもしれない可能性を、いったいどのように思索してきたのだろうか。今日のわたしたちが日本SFを読み直すことは、まさにそうした問題を考え直すことだろう。だがもちろん、それを考えるわたしたち自身が、すでに仮想日本人〈ジャパノイド〉でないとは、決して言いきれない。

目次

ジャパノイド宣言――現代日本SFを読むために　4

序章　柔らかい翻訳
荒巻義雄「柔らかい時計」――または日米SF文化の分岐点　11

第一部　書き手たちへ花束を

1　川又千秋を読むために――『幻詩狩り』と言語　35
2　山田正紀を読むために――『幻象機械』と民族　43
3　梶尾真治を読むために――『未踏惑星キー・ラーゴ』の挑戦　51
4　夢枕獏を読むために――『幻獣変化』の思索　58
5　野阿梓を読むために――『五月ゲーム』と耽美　65
6　神林長平を読むために――『完璧な涙』と機械　77

7 大原まり子を読むために――『メンタル・フィメール』の都市 82
8 柾悟郎を読むために――『邪眼（イーヴル・アイズ）』と性差 87
9 菅浩江を読むために――『雨の檻』と未来 94
10 谷甲州を読むために――『終わりなき索敵』と宇宙 98

第二部　日本SFその過去・現在・未来

オキシデンタリズムを抜けて
SFのなかごろ――SFマガジン四〇〇号の余白に　巽孝之VS川又千秋 105

第三部　読むことのジャパノイド・フィクション

1 死のメタ文学――筒井康隆 119
2 疾走するメガロポリタン――荒巻義雄 122
3 ハイテク地霊国家・日本――半村良 124
4 これは幻詩ではない――川又千秋 129
5 感電するほどの仮想現実――山田正紀 136

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

6 スーパーヒーローは死なない——梶尾真治 141
7 幻獣使いをさがして——夢枕獏 146
8 アメージング明治(メイジ)——横田順彌 155
9 SFを書くか、SFで書くか——かんべむさし 163
10 ポスト・エディプス——野阿梓 166
11 あなたがいて／わたしがいる——神林長平 175
12 パニック・サンプリング——大原まり子 186
13 音楽都市のフォークロア——難波弘之 191
14 ガイアのための四重奏——椎名誠 193
15 バブル以後の宗教史——清水義範 201
16 ビジネス神学からジェンダー哲学へ——草上仁 204
17 都市伝説の旗手——中井紀夫 210
18 中国史メタファンタジア——狩野あざみ 212
19 ジェットコスター・カルト——鈴木光司 214

20 高度資本主義下の日本沈没——柾悟郎 216
21 九〇年代日本SFの異色作家——中島らも 220
あとがき 223
現代日本SF略史 229
初出一覧 234
インデックス（作品・その他） 241
インデックス（人名） 246

序章　柔らかい翻訳

荒巻義雄「柔らかい時計」――または日米SF文化の分岐点

わたしにとって最初の日本SFは、荒巻義雄だった。

その文章に初めて出会ったのは忘れもしない一九六八年末、中学一年生になったばかりのとき。折しも、日本SFのみならずSFジャンルそのものにかんして、何かが起こりつつあるときだった。そして大型新人作家・荒巻義雄が、基本的には第一世代に属しながらも、その理論活動と創作的実践においては、まさに第二世代を領導すべき日本SFの〈新しい波（ニューウェーヴ）〉の先覚者として、燦然と輝いていた。つまり、わたしがSFを本格的に読みはじめた時期というのは、ずばり荒巻義雄がSF同人誌〈宇宙塵〉での大活躍を引き金にして〈SFマガジン〉デビューをはたしていく時期と合致している。根本的なSF観形成において、これ以上に運命的な出会いはない。

たしかに、何かが起こりはじめていた。折しも英米SF界では、従来の外宇宙指向（アウター・スペース）を内宇宙指向（インナー・スペース）へ切り替える六〇年代ニューウェーヴ運動華やかなりしころで、わが国でもJ・G・バラードやサミュエル・ディレイニー、パミラ・ゾリーンらスリリングな前衛SF作家群の紹介がぞくぞくと進み、七〇年には山野浩一の新雑誌〈NW-SF〉もスタート。SFがSF文学へ脱皮をとげようとする気概があふれており、わが国でもおびただしい実験作品が書かれ、けたたましい文学論議が戦わされた。

明らかに何かが起こっている、時代においてもSFにおいても――そんな動きを実感したのは、いまも記憶に生々しい。

そうした風潮を鋭利に反映するかのように、一九七〇年、荒巻義雄は英米ニューウェーヴの実践と理論に匹敵する「時の波堤」（「大いなる正午」）と「術の小説論」をひっさげて鮮烈なプロ作家デビューを飾る。以後ぞくぞくと発表されたメタSF群は心底堪能できるものであり、七八年の連作長篇『神聖代』は初期荒巻義雄のみならず日本的ニューウェーヴSFそのものの集大成だった。この時点で「起こりつつあった何か」は確実にひとつの完結を迎えた。

この作家はやがて英米SFと互角に戦うだろう――それが、当時のわたしの予感だった。

I　柔らかい時間の果てに――ニューウェーヴ・荒巻義雄（アラマキ）・サイバーパンク

またたくまに時は過ぎ、一九八〇年代中葉。

二〇代の末を迎えていたわたしは、一九八四年七月から八七年三月にいたる三年ほどの期間、一九世紀アメリカ・ロマン主義文学研究のためにコーネル大学英文科大学院で学ぶことになる。しかし、ちょうどこのころ、アメリカSF界を震撼させる事件がおこった。ウィリアム・ギブスン八四年の長篇『ニューロマンサー』が主要各賞を総ナメして一躍サイバーパンクSFの到来が告げられたのだ。折しもテキサス州オースティンの北米SF大会を訪れていたわたしは、ギブスンをとりまくブルース・スターリングらサイバーパンク作家たちがエキサイティングな運動開始宣言を下す現場にいあわせてしまう。

この瞬間、何らかの既視感（デジャヴュ）をおぼえなかったといえばウソになるだろう。何かが起こりはじめている――そう、それはほとんど二〇年近くも以前、日本SF界内部で目撃したあの高揚感に酷似していた。やがてサイバーパンク作品とともに運動そのものにわたし自身がいかにまきこまれていったかは、かつて拙著『サイバーパンク・アメリカ』で詳述したとおりだけれど、運動の高揚感が高まれば高まるほどに、作品における既視感（デジャヴュ）もますます強まっていったことは否定できない。従来のビッグサイエンスを扱うSFが巨大な科学文明を描いたいっぽう、サイバーパンクがマイクロエレクトロニクスの成果に根ざしてもっと微小な電脳文化を描くのだとすれば――それによって科学文明の枠組を逆照射しようとしたのだとすれば――そのヴィジョンはまさしく六〇年代ニューウェーヴの時代、荒巻義雄がサルバドール・ダリやJ・G・バラードに想を得たハイテクSF中篇「柔らかい時計」の世界を連想させてやまなかったのだ。

なるほど、荒巻SFの特徴のひとつは、架空の世界律を設定して厳密なまでにそのディテールを描き込む点にひそむ。ただし忘れてはならないのは、その世界律を成り立たせている基盤が、マニエリスティックなまでに遊びの精神に貫かれた「柔らかいテクノロジー」だという点だ。「柔らかい世界」を成り立たせるブヨブヨ工学の作者は、あくまで人間工学的な「平和」を基調にしながら、いざとなれば食べてしまうことのできるほど「柔らかいハードウェア」を構想し、かつ拒食症心理の柔らかな襞へ踏みこんでいく。そこには、それまで「文明の術」の視点ばかりに拘泥していたSFを「文化の術」の視点から柔らかく解きほぐす効用が垣間見られる。

だから一九八六年の十月、サイバーパンク作家のひとりルイス・シャイナーから「日本SFの翻訳紹介に協力したいのだが」という申し出をうけたときには、矢も楯もなく荒巻義雄の「柔らかい時計」を推薦したのだった。かくしてコーネル大学の友人カズコ・ベアレンズの手に成る翻訳草稿をも

とに、シャイナーが徹底的な脚色＝商品化（アメリカナイゼーション）を加えて、「柔らかい時計」英訳版は〈インターゾーン〉一九八九年一／二月号に発表された。

ひとつの日本SFが、J・G・バラードを中心とする六〇年代ニューウェーヴの影響をうけて書かれながら、二〇年近い年月ののちにウィリアム・ギブスンを筆頭とする八〇年代サイバーパンクの文体によってみごと復活していくプロセス。そうした翻訳の歩みを目撃して再認識したのは、必ずしもニューウェーヴからサイバーパンクへという直線的な歴史ではなく、そもそも六〇年代日本SFの成り立ちが、英米SFをモデルとする「柔らかい翻訳」としてはじまったのではないかという前提である。模倣でもなく窃盗でもなく、それは広義における「翻訳」ではなかったか。それは英米SFと等価な文化的対応物を日本的文脈の中に形成するための、一種の野心的な多元宇宙の構築ではなかったか。その意味で、五〇年代ハードコアSFの外宇宙開拓精神よりも六〇年代ニューウェーヴの内宇宙実験精神のほうに、きわめて煽情的な方向性を感じる日本人SF作家がいたとしても、おかしくはない。それは、第一世代に属する小松左京、星新一、筒井康隆にしてからが、ニューウェーヴ運動の台頭をきわめて真剣にうけとめ、七〇年を境に、その動きと拮抗するほどの思弁的にして野心的な実験作品をものした歴史からも、窺い知られる。

以後、少なからぬ時間が流れた。ただし、まさしくそうした柔らかい時間を経たからこそ、いま日米文化の駆け引きそのものの内部において、「柔らかい翻訳」とは何であったかを問い直すチャンスが得られたのだと思う。八〇年代半ば、わたしがシャイナーから推薦作を問われて真っ先に「柔らかい時計」を挙げざるをえなかった真相は、ひょっとしたらそのあたりに求められるかもしれない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com